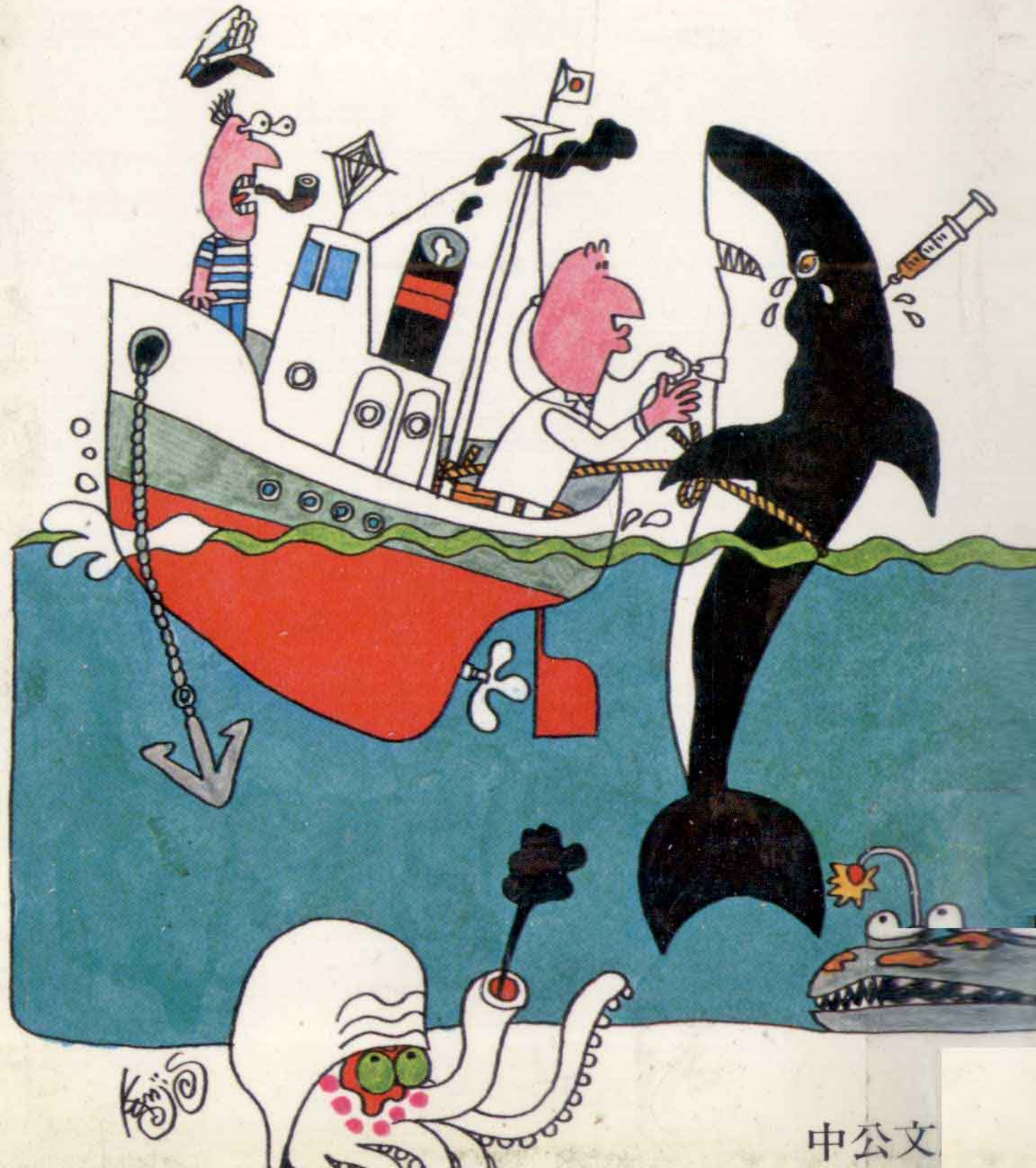
北杜夫

どくとるマンボウ航海記



中公文

中公文庫 ©1973

どくとるマンボウ航海記

昭和四十八年十二月十日初版
昭和五十二年十月十五日九版

著者 北杜夫

発行者 高梨茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二丁目一番地
振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

どくとるマンボウ航海記

北　杜夫著

中央公論社

本文カット　佐々木侃司
表紙・扉　白井晟一

目次

私はなぜ船に乗ったか　七
これが海だ　一六
飛ぶ魚、潜る人　二七
シンガポールさまざま　三六
マラッカ海峡からインド洋へ　四九
タカリ、愛国者たむろすスエズ　六四
ドクトル、閑中忙あり　七七
アフリカ沖にマグロを追う　八八
ポルトガルの古い港で　九九
ドイツでは神妙に、そしてまた　一一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小雪ふるエラスムスの街　一三
霧ふかいアントワープ　一三
パリの床屋教授どの　一四
わが予言、崩壊す　一五
ゴマンとある名画のことなど　一六
盲腸とアレキサンドリア　一八
海には数々の魔物が棲む　一九
本の話から船乗りのこと　一九
コロンボのカレー料理　二〇
帰ってきた燕とマンボウ　二六
あとがき　二七
解説　なだいなだ　二九

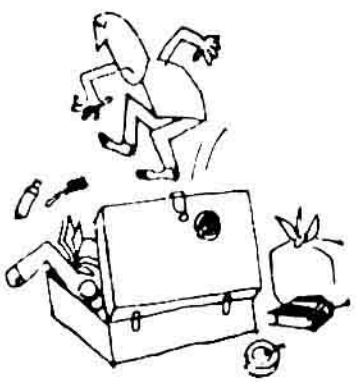
どくとるマンボウ航海記

私はなぜ船に乗ったか

マダガスカル島にはアタオコロイノナという神さまみたいなものがいるが、これは土人の言葉で「何だか変てこりんなもの」というくらいの意味である。私の友人にはこのアタオコロイノナの息吹きのかかったにちがいない男がかなりいる。一人は忍術を修行しようとして壁に駆けのぼり、墜落して尾骶骨にヒビをいらした。一人はリンゴを三十八個むさぼり食って自殺を企てた。一人は学者としておとなしく講義でもしていればいいのに、スパイになりたくて汲々としている。こういう連中がいなかったなら、私は船になんぞ乗らなかったかも知れない。

先年、私はドイツ国に渡ろうと思い、まず神妙に留学生試験を受けたところ、文部省当局は私を書類選考でふるい落した。私はフンガイし、それならば選考委員をだまくらかすため節を屈して論文のひとつも書くかと思案していたところ、Mという男が私に知恵をつけてくれた。

Mは私の勤務している医局の先輩で、ちょうどニューヨークの或る病院に一年勤めて帰ってき



たばかりだったが、これは彼の初志に反することで、本当はもっと世界を放浪するつもりだったらしい。渡米前、彼は研究室にこもりガラス管をいろんなふうにひんまげ、一方の端にさした煙草の煙がフラスコを満たした水中をくぐる装置を作りあげた。彼がいうには、これぞ中国伝来の水煙草であり、肺癌におびえるアメリカ人は争ってこれを購うであろう。そして一心不乱にボコボコ水音を立てながら一日じゅう煙草をふかして実験している光景はたしかに一見するに価するものであった。彼が一年くらいで帰ってきてしまったのは、この苦心の水煙草の装置が予期に反して少しも売れなかったためであるらしい。そのMが私にこう言った。

「あんた、船医になったらどうだ？　そうして、向こうに着いたらスタコラ逃げちまうんだ」

それは天才的な考えだ、と私は言った。ぜひそうしよう。

しかし君は向こうに行っても研究なんぞする気はないのだろう、と彼が訊いた。どうするつもりだね？

精神薄弱児施設に手紙を出してあるんだ、と私は言った。そういう相手ならきっと僕に親近感を抱くだろうからね。

なんという頭の良さだ、と彼はうなった。

そこで私は、すっかりこの計画に満足し、早速ノコノコ或る船会社に出かけて行った。

ところが敵もサルモノである。応待にでた係長は、私が船は未経験だから試しに一航海乗せてもらえないかと述べると、それでは困る、なにしろ見物が目当てですぐやめてしまう医者ばかり

多いので、当方としては最低三年の契約をして貰わねば、とまるでこちらの魂胆を見すかしたような話であった。そのでっぷりした係長は、契約という言葉をいかめしく何遍も使用した。話を聞きながらも私は、たいへん駆足の苦手な私がどこか見知らぬ異国の波止場を一生懸命ドタバタと逃げてゆき、この肥満した男が片手に契約書をふりかざして凄じい勢いで追っかけてくる幻想に悩まされた。あまつさえこの係長は、私が自分は神経科の医者なので手術は苦手だと本音をもらすと、うちは貨物船が多いですから荷下ろしのときなど怪我人が多い、指がちょんぎれる、足がちょんぎれる、頭が割れてしまうのまである、などと私をおびやかしさえしたのである。

そんなことがあってから、去年の十一月になって全く唐突に、水産庁の漁業調査船が船医を捜しているという話があった。その船は大西洋でマグロの新漁場開拓を行ない、欧州をまわって帰ってくる予定だが、もう数日後の出港で、まだ医者が見つからない。何科の医者でもいい、インターン生でもかまわぬという。なにぶんあまり突然の話ではあり、しかも一日二日のうちに決めなければならないのだから、正直のところ私も躊躇した。私にしたって勤めは持っているし丸っきりの風来坊ではないからである。ところがMをはじめいろんな連中が面白がって私をたきつけた。これだけ寄航地の多い船にはすぐ乗れるものじゃない、逃げる逃げないは別として、まあ今度はブラリとあちこち下見をしてきたらいい、それにマグロがたらふく食えるじゃないか。たしかにその船は、シンガポール、スエズ、リスボン、ハンブルク、ロッテルダム、アントワープ、ル・アーヴル、ジェノヴァ、アレキサンドリア、コロンボと寄る予定で、いささかの見物はでき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

そうである。

水産庁に電話をしてみると、向こうでは大喜びで、実は乗ることになっていた医者が都合でやめてしまった、ようやくやはり神経科の医者を捜しだしたところ医局の許可がおりずこれもダメになってしまった、そんなことでもう半月も予定がのびているが、これ以上はのばせないからドクターなしで出港しようと考えていたところだという。結局私は自分でも半ばアッケにとられているうちに、なんとなく乗ることに決めてしまったようだ。私のいる医局では翌春教室主催の学会をやることになっており、果して許可してくれるかどうか危ぶんでいたところ、教授は人間を見る目を持っている人で私のことはすっかり諦めていたらしく、意外に簡単にオーケーになった。なにしろ私はもう何年も医局にいるくせに論文一つ書こうとはしないのである。医局にいると大抵心理とか病理とかの研究室に配属され、いやでも共同研究か何か押しつけられてしまうものだが、私はそんなものを命じられぬよう、小部屋の一隅に『宇宙精神医学研究室』なる看板をかかげ、自らその主任と称し、そこに隠れて空とぶ円盤の書物なんぞばかり読んでいたのである。

その他の障害も案外スムーズに片がつき、いよいよ船に乗りこむことに決定してしまったとき、私はかえって慌てだした。出港まであと三日しかないのである。私は、いくらなんでもこっちだって準備があるからせめて二三日出港を延ばして貰えぬかと交渉したが、これがてんでダメであった。ゆっくり考えられて又そろやめたいなどと言いだされてはかなわぬと役所でも考えたのかも知れない。

ところで照洋丸というその船の大きさであるが、最初私が聞いたときは八〇〇トンばかりとのことであった。これはちっとばかり小さいなと思っていると、水産庁の役人の話ではそれが七〇〇トンとなり、船長の話では六一〇トンとなり、役所で貰ったパンフレットによると六〇二トン九五と書いてある。どうも段々と小さくなる。このぶんではいざ実物を見るときにはポンポン蒸気くらいに縮小してしまいそうである。

しかし船を見に東京湾まで行くと、照洋丸は白く塗られたなかなか瀟洒な船で、ちゃんと鉄でできていた。もっともさすがに大きくはなく、翌日出港するという宗谷の傍を通ったときはそれが小山のように巨大にみえた。医務室もなかなか完備しているが、船医の居室には正直のところガッカリした。いくら狭くても個室が貰えるものと思っていたのに、二段ベッドの二人部屋だったからである。幸いなことに、同室の三等航海士（サード・オフィサー）は、ときにフカのごとき不気味な目つきで人を睨む悪癖を有するほか、極めて気持のいい男であったのは悪魔のハカライというべきで、海上では船が全世界であり、個人の世界は居室だけに限られるから、万一カンシャクもちでネゴトもちでヤブニラミでキンキラ声の、かつ大ボラフキでオセッカイでカサッカキでダッチョウの男なぞと一緒になった日には、そのユーウツさは比類ないものであろう。もっとも贅沢は言えぬので、士官（オフィサー）を除いた一般船員はみんな船底の大部屋であり、ここでは個人的生活はわずかにカーテンをおろした寝棚ひとつの面積に限られている。

さて、それからの三日間というもの、怠惰なる私にとってはまさに世界の終末がきたかと思わ

れた。なにしろ私はめったに床をあげぬほど無精者なので、手際よく荷物をつくりあげるなどという芸当は生れつき不可能なのである。私はカバンの蓋など開け、その中に幾冊かの書物と衣類をつめこんだが、それだけで疲れてしまい、すでに半分ほど飽きてしまい、果ては茫然としてマンガなど読みだす始末であった。しかるに航海の経験をもつ連中が現われて、いろんなことを言う。そのたびに私は、インド洋はさぞかし暑かろうと半ズボンなどをつめ、冬の北大西洋はさぞかし寒かろうと登山に使うヤッケなぞをつめた。「なだいなだ」というふざけたペンネームを有するHが現われ、いいかね、山みたいな大波がくるぞ、コップでも何でも忽ち木っ端ミジンだ、などと大仰なことを言うので、私はわざわざ金属製のコップ、灰皿などを買いこんだ。Aという心理学者で国際ゴロみたいな男が現われ、ツカを機関銃で射つのは面白いぞと教えてくれたが、機関銃を買いこむわけにはいかず、ただ彼が船中で飲むコーヒーのいかに美味であるかを力説するので、わざわざネスカフェーなど買いに出かけた。その間、私はそれまでの勤務にカタをつけねばならず、船の検疫と予防接種に立会ったり、海運局で船員手帳を貰ったり、夜は夜で飲みに出かけなければならなかった。私は支度金をもらったので、カメラやナイロンシャツやボールペンなどを購入し、すっかり物持ちになり、荷作りは益々面倒なものになってきた。あまつさえMが現われ、もっとこまごました日用品が大切だ、そんなもので向こうで金を使うのが一番つまらんぞと言うので、歯ブラシ、鼻紙など商売できるほど買いこみ、ほとほと途方にくれ、こまごましたものなんて考えだせばキリがないから、しまいにはカンシャクを起し、もう何がきたってこ

れ以上入れるものかという気になった。

しかし彼等はなかなかいいことも言ってくれた。Mは、ミヤゲなんて買わずに一杯でも多く酒を飲めと言った。それからスケッチブックを持ってゆけとも言った。スケッチなどする閑はないだろうというと、いやいや、長い航海ではのんびりスケッチなどしないと時間を持て余す、写真と違ってまた格別の味わいがある。私はなるほどと思い、画用紙と鉛筆を羊に食わせるほど買いこんだが、結局一枚の絵も描きはしなかった。またAは、ミヤゲに風呂敷を持ってゆくといいと言った。そんなものさらさら持ってゆくつもりはないと答えると、いやいや、外国の街を歩いていてひょっと思いがけない親切を受けるときがある、御礼しようとしてもこっちには金がない、あっても金ではまずいことがある、そういうときにやるには絹の上等なものを買ってゆく必要はない、百貨店などでくれて使うにも始末に困る奴を集めてゆくがいい。私はなるほどと思い、貰い物の風呂敷を何枚か持参したが、これもちっとも効果的に使いはしなかった。と言うのは、いざそれをあげたいと思う女の子などに会ったときにかぎり私は風呂敷を持ちあわせていなかったからである。私はけしからぬエジプトのパイロットなんかにそれを与える羽目になったり、思いがけず世話になった日本人のところに致し方なく置いてきたりした。そういう日本人のお宅では、ミヤゲに持ってきた風呂敷というからには恐らく上等のものと考え、あとで見ればデパートのマークなんぞあるのでさだめしアキれたろうと思うが、これは私の責任ではない。

辛うじて十一月十五日、出港の二時間前になって、私は行李とトランク二個をフウフウ言いな

がら船に運びこんだ。それをほぐしたり並べたりしていると早くも時間である。この三日間でクタクタの上に少し酔っぱらっている私には感慨なんて起りようがなかった。それでも無数のテープが潮風になびいて音を立てたときにはちょっといいものだなと思ったが、じきにこれは大変間の抜けたことであることがわかった。なぜなら曳船にひかれた船は容易なことでは岸壁から遠ざからず、その間見送り人も船の者もテープを抑えたり手をふったりしつづけねばならぬので、終いにはすっかり手がくたびれてしまうのである。いっそのこと、双方でロープかなにかをエイエイ曳きあい、敗けたほうがザンブと海に落ちこむことにしたらどんなものであろう。

ともあれ、こんなふうに私は、自分でもオヤオヤと思っているうち、日本を離れてしまった、と人は思うだろうが、実はその翌日ちゃんと新宿の裏町を歩いていたのである。

船はその日の夕方千葉の館山に着き、ここで米を積みこむため一日半停泊することになった。館山に近づくころになると、船の非番の連中は汽車の時間を調べて帰宅の用意をはじめた。なかには家にほんのちょっと寄るだけですぐまた汽車に乗らねばならぬ遠距離の者もいる。そのくらい海で暮す人にとっては陸と家が貴重なものになっているのだろう。こんなところから帰ってゆくなどとは考えてもみなかったから、どうしたものかと迷っている私にむかって主席航海士（チーフ・オフィサー）が言った。

「ドクター、海に出てしまうとね、あのときもう一晩畳の上で寝ておけばよかったとあとで思いますよ」

私はこの言葉に感心し、その夜おそくノコノコ東京に戻ってきた。翌日新宿をぶらつき、はじめてノンビリした気分になり、映画を見たりパチンコをやったりした。そうしていると、なにか密入国でもしたみたいな、へんに擽ったい気分がつきまとってくる。なにぶん今度の航海はだしぬけに決ったのでごく一部の人にしか知らせることができず、おまけに私はホラ吹きなので友人の大半は信用せず、ひどいのになると私が帰ってきてからも「マグロ船に乗ったそうだが本当か？　そこらに隠れてたのじゃないか」などと言われたが、事実は一日だけ余計日本にいたのである。

このとき私は誰にも戻ってきたことを知らせなかったけれど、Aにだけは或る用件を思いだして電話をかけた。電話口の向こうで、さすがにビックリしたような声が叫んだ。

「なんだ？　もう逃げちまったのか！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com